

箏曲点字楽譜の形成過程に関する研究 —盲教育の黎明期から宮城道雄（1894-1956）による実践まで—

村山 佳寿子
(お茶の水女子大学大学院)

本論文は、洋楽のシステムに基づく点字楽譜が、日本の伝統音楽の一種目である箏曲と結びつき、近代における音楽教育や盲教育の発展と共に、箏曲のための固有の記譜法として形成されてゆく過程を明らかにしたものである。

盲人が扱う楽譜という特殊性故に、これまで研究対象とされることが殆どなかった箏曲の点字楽譜は、洋楽とのシステムの違いから“五線譜化”に時間を要した。このことについて、盲教育の分野では、「大正、昭和と研究が積み重ねられ、幾多の変遷を経て今日に至っている」という事実のみが、その内容を明らかにせぬまま紹介されている。本論文では、解決の足掛かりとなる、大河原欽吾『点字発達史』（1937）に不足している内容の補完、すなわち、概説的にしか述べられていない事実や未だ提示されていない記譜法の内容を、文献内で紹介されている点字や墨字（印刷等によって目で見ることが可能な文字）の史料に当たって紐解いた。同時に、『宮城道雄音楽作品目録』（1999）によってその存在が楽譜資料として公表されている、宮城道雄の自筆点字楽譜の内容を調査した。さらに、明治期以降の盲人と箏曲を取り巻く歴史的背景を、音楽教育を含む日本音楽や、盲教育に関する周辺の史資料を用いて検証し、それを箏曲の伝承における口頭性から書記性への変化の枠組みの中で捉えることで、それらの研究史の中に箏曲の点字楽譜を位置づけることを目指した。

論文全体の構成は、序論、結論のほか、箏曲の点字記譜法が考案される以前の、学校教育制度への点字楽譜の導入をめぐる動向について論じる第1部（第1章、第2章）と、実際に箏曲の点字記譜法が考案され、変化してゆく過程や、実践としての点字楽譜を論じる第2部（第3章から第5章）の、2部立てとした。このうち、本発表では、主に第2部を取り上げ、音楽教育を受けた盲人にとって、どのような記譜法を使い易いと感じるようになっていったのか、箏曲の点字楽譜の“五線譜化”という観点から考察する。